

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：心理・社会福祉学科

資格：教授

氏名：糸魚川 直祐

研究分野	研究内容のキーワード
基礎心理学	行動観察・実験
学位	最終学歴
博士（人間科学）, 文学修士	大阪大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 武庫川女子大学・同短期大学部、共通教育科目「大学生入門」講義	2013年4月および9月	新入生を対象に大学生として主体的な学びの必要性とその方法について講じた。
2. 武庫川女子大学・同短期大学部新入生対象学長特別講義	2013年4月	全新生対象に本学の教育理念である「立学の精神」とそれに基づく「教育目標」達成の方法について学生の取り組みの実例を中心に講じた。
2 作成した教科書、教材		
1. 「心理学の基礎」糸魚川直祐・春木豊編（有斐閣）	1989年6月初版	心理学の基礎に関する理論、実証データを概説した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 海と陸との環境共生学—海陸一体都市をめざして—	共	2004年12月	大阪大学出版会	上嶋他編、糸魚川直祐・村田武一郎・惣田訓・前浜洋平・沢田裕美子・藤井義之著 沿岸域における海陸一体都市の概念と構想に対し生態、景観、エネルギー、経済活動、地域総合管理などの視点について都市工学系専門家と一般の人々にアンケート調査を行い結果を論究した。
2. Emerging demands for the safety of nuclear power operations. Introduction:Nuclear industry in a new environment.	共	2004年07月	CRC Press: Boca Roton, London, New York & Washington, D.C.	Itoigawa, Wilpert & Fahlbruch. 原子力発電など原子力関連事業における作業、管理等における安全性の問題について、ヒューマンエラー防止の観点より論じた。
3. 風土と文化—安全性を確かなものにするために—	単	2003年03月	プレジデント社	産業場面、とくに原子発電に関わる場面において、作業・業務の安全性確保にとって、なにが大切かを検討した。安全性確保にとって、職場、作業場面における人間関係を含む環境、つまり風土と、それを生み出す背景となる社会的要因、つまり文化が重要であることを論述した。（pp. 11~12）（章分単著）（全pp. 224）
4. 比較行動学（エソロジー）について「サルとヒトのエソロジー」	共	1998年03月	培風館	糸魚川・南編、糸魚川・安藤・小山・渡辺・南他 本書はサルとヒトのエソロジー（比較行動学）研究の進め方の実際を課題の設定、方法の採用、結果の抽出、考察の仕方にわたり示したものである。本人は本書を編し、エソロジー研究の目的は行動による進化のメカニズムの解明であっても、狭義のメカニズムの定義にとらわれず、個体の生涯発達にわたり、個体を個体群のなかでとらえ、個体の内面活動を侵さず、行動の機能を重視することを説いた。（pp. 1~4）
5. サルの群れの歴史—岡山県勝山集団の36年の記録—	単	1997年11月	どうぶつ社	岡山県勝山において本人が1958年より観察しているニホンザル集団成員の個体資料と集団の変遷に関する資料をまとめ、集団の変遷に関わる一般原則を導

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
6. サル社会にこころを見る人間のこころを考える1「こころ・いのち・人間」	共	1997年03月	岩波書店	き、一般原則と個別事例との整合性を検討し、全体の内容を単行本としてまとめた。サル集団の変遷をあえて歴史とよんだ理由は、サル集団の変遷が人との関わり合いによって進行し、サルが人の駆逐圧力に抗し個体の生存と個体群の存続を達成しようとする固有のいとなみであることによる。(A5判総174頁) など・下重・大原・糸魚川・梅原・永 本書は人間のこころを考えるというテーマのもとに、さまざまな領域の人が意見や考えを提起したものである。本人は担当章において、これまで長年野外や実験室においてサルの行動を観察した経験から、サルが細やかな仕方で相互に意思を伝達しており、また人に対しても同様に細やかに反応していることを指摘し、われわれの多くがこのことに気づいていないところに、人のこころの貧しさが現れていると述べた。(pp.113~154)
2 学位論文				
1. ニホンザル集団の変遷—岡山県勝山集団について—	単	1998年	大阪大学	野外に生息するニホンザル集団の変遷について個体史のデータをもとに論述した。博士(人間科学)学位論文。
3 学術論文				
1. 学齢期検診からみた不妊治療の長期的影響(査読付き)	共	2012年8月	周産期医学, Vol. 42, Pp. 1053-1057.	不妊治療を受けたことのある女性が妊娠、出産したとき児が超低出生体重児である事例について、児の学齢期にいたるまでの長期的影響をおもに発達心理学的指標により調べた。共著者：金澤忠博、安田純、北村真知子、鎌田次郎、日野林俊彦、糸魚川直祐他。
2. The change of interests of Japanese schoolgirls around puberty.	共	2011年08月	15th European Conference on Developmental Psychology, International Proceedings, Medimonnd, Pp. 441-444.	Hinobayashi, T., Kato, M., Yamada K., Kanazawa T., Akai, S., Minami T., & Itoigawa N>. 思春期における日本人女子(9-15歳、計41, 798名対象)の調査をもとに、興味の実態を考究した。
3. 超低出生体重児の精神発達予後と評価—軽度発達障害を中心に—(査読付き)	共	2007年04月	周産期医学, Vol. 37, Pp. 485-487.	金澤忠博、安田純、北村真知子、糸魚川直祐、南徹弘、鎌田次郎、北島博之、藤村正哲 学齢期に達した超低出生体重児にたいし、知能検査など各種の心理学検査を行い、軽度発達障害を中心に精神発達予後と評価について検討した。
4. 緒言：心理・行動面に関する学齢期総合検診	単	2007年04月	大阪府立母子保健総合医療センター創立25周年記念論文集「超低出生体重児の学齢期総合検診」メディカ出版	超低出生体重児の学齢期総合検診における心理・行動面に関する取組について。
5. 心理部門における検診の目的・方法総括	共	2007年04月	大阪府立母子保健総合医療センター創立25周年記念論文集「超低出生体重児の学齢期総合検診」メディカ出版	糸魚川直祐、南徹弘、日野林俊彦、金澤忠博、鎌田次郎他 超低出生体重児の学齢期総合検診における心理部門の検診の目的、方法、結果の総括。
6. 超・極超低出生体重児の学齢期における学力：学習障害の疑いのある児を中心に	共	2007年04月	大阪府立母子保健総合医療センター創立25周年記念論文集「超低出生体重児の学齢期総合検診」メディカ出版	糸魚川直祐、南徹弘、日野林俊彦、鎌田次郎他
7. 児童発達心理の立場から見た超低出生体重児の予後。(査読付き)	共	2005年12月	日本周産期・新生児医学会雑誌, Vol. 41, Pp. 779-787.	金澤忠博・安田純・北村真知子・糸魚川直祐・日野林俊彦・南徹弘他 超低出生体重児の心理面の発達について、とくに学齢期における知能に焦点をあわせ、測定データの検討と考察を行った。
8. 海陸一体都市の評価と展望	共	2004年12月	上嶋英機他編著「海と陸との環境共生学—海陸一体都市をめざして	糸魚川直祐・村田武一郎・惣田訓他 大阪湾沿岸域において海陸一体都市を想定したとき環境共生学の立場からどのような評価と展望が下せるかについてアンケート調査の結果をもとに論述した。
9. 母子愛着の生態	単	2004年05月	教育と医学	比較行動学、生態学の視点から、霊長類などと比較し、人間における母子間の愛着について考察した。
10. カンガルーケアの効果(査読付き)	共	2004年04月	Neonatal Care	金澤忠博、北島博之、小瀬良幸恵、中農浩子、山本悦代、・・糸魚川直祐 極低出生体重児を母が皮膚と皮膚を接触させて抱くというカンガルーケアが母子関係の形成と児の発達により効果があることを明らかにした。
11. エソロジーから見た人の母性・父性	単	2004年03月	早稲田大学人間総合研究センター	エソロジー(比較行動学)の視点から、霊長類としてのヒトの母性、父性を論じ、社会的な集団のなかで子が健康に育つためには、血縁個体としての母親、父親のみならず他の成体の役割も重要であることを指摘した。全(pp.309~312)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. 超低出生体重児の精神発達予後(査読付き)	共	2003年05月	日本未熟児新生児学会雑誌 15巻 2号	金沢・安田・糸魚川/・北島・藤村 低出生体重児が出生より学齢期まで、さらにはそれ以後の年齢に至るまで、どのような発達過程をたどるかについて、親子・家族関係、保育所・幼稚園・学校等における関係などを含め、筆者らは長年追跡研究を行っている。本論文はとくに学齢期までの低出生体重児の精神発達予後に関する結果をまとめ、低出生体重児は一部に発達上の問題はあがるが、キャッチアップの過程にあることを示した。担当 (pp. 21~33)
13. The role of individuals in the history of a free-ranging group of Japanese macaques: Some thoughts on the relevance for human behavioural research. (査読付き)	単	2001年	International Journal of Behavioural Development, 2001, 25(2), 184-186.	ニホンザル自然群の歴史の変遷において、個体がいかに変遷にかかわったかを継続的観察資料に基づいて示した。
14. A forty-year history of a free-ranging Japanese monkey group: comparability to human society.	単	1999年	Social and Psychological Change of Japan and Germany. Waseda University Press	野外に生息するニホンザル集団について、その社会構造、集団成員の個体生育歴、集団内における成員の社会的関係などの面から、集団の40年の歴史的展開の過程を論じ、人間社会との比較を試みた。その結果、社会構造、集団の行動特性、社会的関係などについて、ある程度の類似性があることが示唆された。全 (pp. 157~162)
15. 看護教育を人間科学から考える	単	1998年03月	看護3月号(第28回日本看護学会特別講演・シンポジウム集録号)	日本看護学会におけるシンポジウム講演をもとに、特集号のために論述した。看護教育において人間を生物的、心理・行動的、社会的な面から総合的、科学的にとらえる人間科学の視点を強調し、21世紀の看護教育を創造するには、愛他性の存続の重要性を認識し、看護を人類の進化史のなかで位置づける必要性を述べた。(pp. 102~105)
16. Cardiac and behavioral responses to humans in an adult female Japanese monkey (Macaca fuscata) (査読付き)	共	1998年	Anthrozoos, 11(2), 1998	Koda, N.・Machida, S.・Goto, S.・Nakamich, M.・Itoigawa, N.・Minami, T. ニホンザルの成体メスに対し、テレメータによる心電図測定装置を外科手術により皮膚下に装置し、既知の人、未知の人(新奇性大)を提示し、心電図の反応を測定し、サルが新奇性に対し異なった反応を示すことを示した。
17. Intelligence and learning disabilities for 6 to 8 year old children weighing under 1000 grams at birth. (査読付き)	共	1997年	International Journal of Behavioral Development, 20(1).	Kanazawa, T., Shimizu, S., Kamada, J., Tanabe, H., & Itoigawa, N. 低出生体重児が6、7、8歳に成長したとき、各種の精神発達検査と学習障害の疑いの有無を調べる検査を行った結果、一部の低出生体重児に問題があることが分かった。(pp. 179~188)
18. 双胎の極低出生体重児の学齢期における心理・行動(査読付き)	共	1997年	小児の精神と神経37巻2号	金澤・中農・清水・糸魚川・南・藤村 双胎の極低出生体重児が学齢期に達したとき、精神発達など児の心理・行動特性を多面的に調べた結果、双胎児の特性は一般に相関が高かった。(pp. 113~119)
19. 極低出生体重児の学齢期における心理学的評価: 学習障害(査読付き)	共	1996年	Neonatal Care 9巻2号	金澤・糸魚川・南 出生時の体重が1,000グラム未満の極低出生体重児(超未熟児)のなかに学習障害の疑いのあるものがある。これまでの追跡研究をふまえて学齢期に達した極低出生体重児について学習障害の疑いのある児を検索した。(pp. 29~34)
20. 人との対面時における飼育ニホンザルの血圧と行動(査読付き)	共	1996年	ヒトと動物の関係学会誌2巻1号	甲田・待田・後藤・中道・糸魚川・南 飼育ニホンザルに血圧測定用のテレメータを装着し、見知らぬ人と顔見知りの人を対面させ、サルの血圧と行動を比較したところ、血圧にも差が見られた。(pp. 28~33)
21. 極低出生体重児の学齢期における心理学的評価: 児童へのアンケートによる生活・心理調査(査読付き)	共	1996年	Neonatal Care 9巻2号	中農・山本・小林・金澤・糸魚川 学齢期に達した極低出生体重児についてアンケートにより家庭・学校生活と心理について調査した結果、一部の児に問題が見られた。(pp. 49~56)
22. 極低出生体重児の学齢期における心理学的評価: フロステイグ視知覚発達検査(査読付き)	共	1996年	Neonatal Care 9巻2号	清水・金澤・鎌田・小島・糸魚川他 学齢期に達した極低出生体重児についてフロステイグ視知覚発達検査を行った結果、一部の児は作業をあわててしたため、成績が劣ることが分かった。(pp. 23~28)
23. 極低出生体重児の学齢期における心理学的評価: 親子・家族関係(査読付き)	共	1996年	Neonatal Care 9巻2号	鎌田・糸魚川・南他 学齢期に達した極低出生体重児について親子・家族関係をアンケートと面談により調査した結果、少数のものに親子・家族関係に問題があり、子がいじめを受けていることが分かった。(pp. 41~48)
24. 極低出生体重児の学齢期における心理学的評価: 行動分析による児童の特徴(査読付き)	共	1996年	Neonatal Care 9巻2号	金澤・糸魚川・南 学齢期に達した極低出生体重児について精神発達検査を行い、検査時の行動分析の結果、多動傾向の児

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
25. Parenting and family support in Japan for 6 to 8 year old children weighing under 1000 grams at birth. (査読付き)	共	1996年	International Journal of Behavioral Development, 19(3).	がいることが分かった。(pp. 35~40) <u>Itoigawa, N.</u> , Minami, T., Kondo, K., Tachibana, H., et al. 低出生体重児が6、7、8歳に成長したとき、母親、父親、他の家族メンバーによる育児協力を調べた結果、父親の育児協力は児の特性よりも家族構成に依存することが分かった。(pp. 935~938)
26. Carrying and washing of grass roots by free-ranging Japanese macaques at Katsuyama. (査読付き)	共	1996年	Folia Primatologia, 69.	<u>Nakamichi, M.</u> , Kato, E., Kojima, Y., & <u>Itoigawa, N.</u> 野外に生息するニホンザル集団のメンバーのなかで、複数の成体メスが食物となる草の根を地中から掘り出し、いくつか手で束ねて川の岸辺に運び、流水で根についている泥を洗い流した。また、あるサルは泥を洗い流すとき、岸辺にある平板状の岩の上で根をこすった。本論文では、このような観察結果をもとに、ニホンザルにおける道具使用の問題を考察した。(pp. 35~40)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 一人っ子女子は早熟で、乳幼児への関心が低いのかー日本全国4693人の児童、生徒の分析	共	2016年4月	日本発達心理学会第27回大会	日本全国在住の4693名の児童・生徒を対象に心身の発達と乳幼児への関心の関連を調査し分析した。共著者：日野林俊彦、清水(加藤)真由子、金澤忠博、南 徹弘、糸魚川直祐。
2. 思春期における性別受容と来朝の関わりー日本全国45,665人の調査よりー	共	2015年3月	日本発達心理学会第26回大会	継続的に行なっている大規模な全国調査の結果をもとに思春期の女性の性別受容と初潮時期との関連性を明らかにした。共著者：日野林俊彦・清水(加藤)真由子・金澤忠博・南徹弘・糸魚川直祐
3. 学童の認知されたコンピテンスと親の養育スタイルー親の体罰は児童の自己肯定感に悪影響があるー	共	2015年3月	日本発達心理学会第26回大会	学童が自身の諸能力を認知し自己を肯定的に捉えるとき親の体罰は悪影響を及ぼすことを明らかにした。共著者：鎌田次郎・金澤忠博・安田純・日野林俊彦・南徹弘・糸魚川直祐
4. 思春期女子における興味・関心の変化	共	2014年3月	日本発達心理学会第25回大会発表論文集, p. 543.	日野林俊彦、清水(加藤)真由子、金澤忠博、南徹弘 糸魚川直祐。小学生上級学年、中学生、計45,665名を対象とする調査から、思春期女子における興味・関心の変化を総合的に捉えた。
5. 超低出生体重児の行動や学習の問題は本当に発達障害なのか？	共	2014年3月	日本発達心理学会第25回大会発表論文集, p. 672.	金澤忠博、鎌田次郎、安田 純、井崎基博、清水真由子、日野林俊彦、南 徹弘、北島博之、藤村正博、糸魚川直祐。平均年齢8歳の超低出生体重児(計約500名)についての行動および学習の検査結果から、超低出生体重児には一般の自閉症スペクトラム障害とはかならずしも同じでない特性が見られた。
6. 超低出生体重児の読みの特性	共	2014年3月	日本発達心理学会第25回大会論文集, p. 427.	井崎基博、金澤忠博、鎌田次郎、日野林俊彦、北島博之、糸魚川直祐。 学齢期にある超低出生体重児を対象に、語彙、音韻能力、知能などの関連性を調べ、単語読みには語彙能力と音韻能力が関連するなどの知見を得た。
7. 学齢期における発達障害と父親の養育態度ー超低出生体重児の調査からー	共	2013年3月	日本発達心理学会第24回大会発表論文集、p. 333	共著者：鎌田次郎、金澤忠博、安田純、日野林俊彦、南徹弘、糸魚川直祐。 超低出生体重児について、学齢期にみられる発達障害と父親の養育態度との関連を探索した。
8. 集団健康指標としての平均初潮年齢	共	2013年3月	日本発達心理学会第24回大会発表論文集、p. 410.	共著者：日野林俊彦、清水真由子、大西賢治、金澤忠博、南徹弘、糸魚川直祐。 集団健康の指標として平均初潮年齢の有効性などについて検討を行った。
9. 超低出生体重児の学齢期における気質と発達障害の関連	共	2013年3月	日本発達心理学会第24回大会発表論文集、p. 334	共著者：安田純、金澤忠博、清水真由子、井崎基博、鎌田次郎、日野林俊彦、南徹弘、糸魚川直祐。 超低出生体重児の学齢期における発達障害と対象児の気質との関連を探索した。
10. 不妊治療で生まれた超低出生体重児の心理的予後	共	2013年3月	日本発達心理学会第24回大会発表論文集、p. 332	共著者：金澤忠博、安田純、鎌田次郎、日野林俊彦、南徹弘、末原則幸、北島博之、藤村正哲、糸魚川直祐。不妊治療を受け妊娠し出生した児なかの超低出生体重児を対象に、その成長、発達、発達の子後について、心理学的な追跡研究を行った。
11. 初潮年齢の及ぼす同輩効果ー同輩数効果と集合モデルー	共	2012年03月	日本発達心理学会第23回大会発表論文集、	日野林俊彦・加藤真由美・金澤忠博・南徹弘・糸魚川直祐 同輩数効果と集合モデルの視点から初潮年齢について調査研究を行った。
12. 発達障害のある超低出生体重児の行動評定ー発達障害と行動問題の関係	共	2011年03月	日本発達心理学会第22回大会発表論文集	金澤忠博他8名 発達障害をもつ超低出生体重児について、行動評定をおこない、発達障害と行動問題の関係を追究した

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
13. 母親にたたかれる子どもの気質と愛着一超低出生体重児の学齢期における調査から	共	2011年03月	日本発達心理学会第22回大会発表論文集、	鎌田次郎他6名 学齢期における超低出生体重児と母親を対象に調査し、たたかれる子の気質と母子の愛着関係を探究した。
14. 一人っ子の女子児童・児童生徒の早熟傾向について—日本全国4000人の資料をもとに—	共	2009年03月	日本発達心理学会第20回大会発表論文集	日野林俊彦、安田純、山田一憲、南徹弘、糸魚川直祐 一人っ子の女子児童・児童生徒の早熟傾向を性別受容、興味・関心などについて、日本全国4000人の調査資料をもとに検討した。
15. 超低出生体重児の学齢期における愛着スタイル	共	2009年03月	日本発達心理学会第20回大会発表論文集	金沢忠博、安田純、糸魚川直祐他 超低出生体重児が学齢期に達したとき、どのような愛着スタイルを示すかを調べた。
16. 発達加速現象の研究・その21 性別受容と初潮	共	2007年09月	日本発達心理学会第18回大会発表論文集	日野林俊彦、赤井誠生、安田純、志澤康弘、山田一憲、南徹弘、糸魚川直祐 発達加速現象の長期的研究の視座のなかで、対象者の性別受容と初潮との関連を探究した。
17. The value of children in relation to the family concept: A preliminary study in Japan.	共	2006年10月	Proceedings of the 9th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences (Kanazawa Univ., Japan)	Kobayashi, M., Itoigawa, N., Tachibana, Y., Fujitani, T., Yato, Y., and Trommsdorff, G. 子どもに価値に関する国際的調査の一部としてわが国で行った調査の予報。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 女子大学の将来	単	2011年10月	IDE 現代の高等教育 No. 534, Pp. 30-34.	教育のねらい、方法、内容、教育環境などから、女子大学の将来について記した。
2. 子供の価値をめぐる家族観についての国際比較研究（平成17-19年度科学研究費補助金研究成果報告書、平成21年3月、小林亮・糸魚川直祐・橘良治・藤谷智子・矢藤優子・Trommsdorff, G.）	共	2009年3月	平成17-19年度科学研究費補助金研究成果報告書	小林亮・糸魚川直祐・橘良治・藤谷智子・矢藤優子・Trommsdorff, G. 日本人の祖母、母、娘の3世代を対象に、子供の価値をめぐる家族観について意識調査を行い、国際比較の観点から結果を考察した。
3. 個体史と行動	単	2006年	心理学ワールド、日本心理学会刊、p.1	固体史の視点から行動研究を行う意義を記した。
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	日本動物心理学会 日本発達心理学会 日本霊長類学会